

華嚴經における救済観

福 原 蓮 月

華嚴經に如何ほど救済の種類を説くか。之につき、旧訳（大正九・四二五c以下）と新訳（大正一〇・六五b以下）とに八種を数えるが、探玄記四（大正三五・七四c以下）の表現で掲

切、仏智、(10)顯現仏力をいう。以上は救済の種類についての經文の記事であつた。次には華嚴經全体の上より救済観を眺めることにしよう。

けると次のようである。(1)痴愛の衆生を救う、(2)五欲の衆生を救う、(3)著我の衆生を救う、(4)惡趣の衆生を救う、(5)外道邪見の衆生を救う、(6)三有に著する衆生を救う、(7)無明の衆生を救う、(8)長囚の衆生を救う、と。此れは經中「光明覺品」に出るもので、光明が無尽の世界を照し、利他することを説く。もし仏大悲の側から救済を言えば、仏力摂生であり、業の側から自業自得（自調自度）に外ならず、後者に於いては発菩提心以外でない。それを經（大正九・六三五a以下）には十種の發菩提心ありというが、これは自調という面のあるままに、利他心の發起と云つてよい。十種とは、(1)教化成熟一切衆生、(2)除滅一切衆生苦、(3)与一切衆生種種快樂、(4)除滅一切衆生愚闇、(5)与一切衆生仏智、(6)恭敬供養一切諸仏、(7)隨三如来教、令三仏歡喜、(8)見三仏色身相好、(9)入三

この經の全体は成道の内実を顯現するもので、三十四品の組織すべて、盧舍那仏の因果を説くものと云つてよく、そこに重重无尽の縁起が説かれ（第一教起因縁分）、信を生じ（第二挙果勸樂生信分）、解を起し（第三修因契果生解分）、行を成じ（第四託法進修成行分）、法界真如に証入させる（第五依人入証成德分）ことを目指すものである。そして最後の「入法界品」は仏菩薩等の知識の教により法界真如に証入させる方法を示すことが目的と言われねばならない。華嚴經の「普賢菩薩行願品」（般若詔）は淨土五經（三部經と楞嚴經勢至菩薩念仏章と此品）中の一經で、一の見方に依れば此一品が存する故、此經を救済經典と見ても誤りではない。即ち『華嚴經』全体の仏願力・仏威神力に對し、經典最後の「入法界品」（即ち「普賢菩薩行願品」）には普賢の行願力が説かれ、次の如く（大正九・七

○四^a）言う、「不可説不可説の衆生の方便門は、悉く現じて前に在り、十力智を具して普賢菩薩の行願力を出生するが故に」と。実に普賢の行願力は仏願力・仏威神力に依る賜物と見ざるを得ない。ここに救済の根元を見る。

「入法界品」に登場する善財は、知られる通り、福城の長者の下で求道の志強き青年であり、求道に励み前進し向上し続ける菩薩であるが、此人が発心して五十三人の善知識を歴訪し、最後には普賢に遇い、其の十大願を聞いて西方の弥陀仏国に生まれ法界に入らんことを願う。所謂の普賢の十大願を速かに満足するには極樂に往生するほかない、とて次の如く説かれる。「唯此願王、不相捨離、於一切時、引導其前、一刹那中、得往^{スル}生極樂世界、到已即見^{ツテ}阿弥陀仏」と。

竜樹著『十住論』は華嚴十地の初二地の広き解釈書であるが、竜樹は華嚴の顕密中、深秘の意趣に徹し、同論中に「易行品」を説示し、浄土の法門を顕揚した。此の『華嚴經』の宗致は一説に、顕の面では盧舍那仏の因果を説くものであるが、密の面では「普賢行願品」（大正一〇・八四四b以下）より逆見すれば阿弥陀仏の本願を説くものと言える。即ち密の面で窺えば彼の盧舍那仏は即本願成就の無碍光仏（不可思議光仏）にほかならず、本經に再三説かれる蓮華藏世界は西方安樂世界とみてよい。また本經に十信十住十廻向十地等を説くが、之を密の面で窺えば十信は本願の信樂、十住以上は

信樂成就の功德とみられる。この顕密の見方は『大日經義釈』に於いて『十地經』の十地一一の名言に対し深秘釈・浅略釈の二釈ありと為すものを華嚴の上に応用して立てた妙釈とみられよう。

ここで菩薩の救い・仏の救いの両面を眺めたい。本經「十明品」に仏の十種明を説くが、此れは菩薩の智慧を示す。それは又「成就大慈悲」であり、大慈大悲ある故にこそ、次の經文（大正九・五七九c以下）に説く如き救いをなす。文にいう。「開發示導、稱揚顯現、具足清淨。滅衆疑網、攝取衆生、不捨^テ実法、於不二法、而不退沒、具足成就^シ無碍法門、微妙音声、普雨^ス法雨」と。

菩薩に代受苦の大悲あることを「十廻向品」（大正九・四八九a以下）に次の如く説く。「此諸衆生、具^{サニ}有^リ無量^ノ大惡罪業、應^ニ受^ス無量^ノ无边^ノ楚毒、我^ガ當^ニ於^テ彼^ノ三惡道中、悉^ニ代^リ受^ス苦令^レ得^ル解脫、我^ガ當^ニ代^リ受^ス無量^ノ苦惱」と。また「入法界品」（大正九・六八三a以下）に説く。「菩薩見^ニ如來、無量^ノ淨功德、皆悉^ニ廻向……大仙^ノ普慈恩、不可思議劫、代^リ衆受^ス苦故、無量億劫中、受^ス諸地獄苦、不^レ捨^テ一切衆、悉^ニ令^レ得^ル見^ス仏、普能^ニ代^リ衆生、具^{サニ}受^ス無量^ノ苦、其心無^シ疲倦」と。この代受苦については問題があり、『華嚴經探玄記』七（大正三五・二四五c）に問うて云う。「問。自作^ラ自受^ラ、云何^ニ菩薩能^ハ得^ル代^リ耶」と。之に応えるに六義を示すのは注意を要する。六義を取意

して示せば(1)苦の事を以つて自ら必らず其の願力を増すからである、(2)菩薩が煩惱を留めて衆生と同じ事をなすからである、(3)衆生の極苦を逃れしめる為には衆生を殺す場合もある、(4)菩薩は修行が究竟地に至り自在に衆生の苦に代りうるからである、(5)菩薩は衆生と団体という願力、融通によつて代るといえるからである、(6)衆生の苦は自分自身の苦(普賢の苦)とみるから受苦するという理由による、という。

仏の救いは衆生を救済することを本務となすことを「入法界品」(大正一〇・三二六)に説いて言う。「如来大慈悲、出_ニ現_ニ於_ニ世間_ニ、普_ニ救_ニ諸_ニ衆生_ニ、轉_ニ無_ニ上_ニ法輪_ニ、如_ニ來_ニ無_ニ數_ニ劫_ニ、勤_ニ苦_ニ爲_ニ衆生_ニ。云何_ニ諸_ニ世間_ニ、能_ニ報_ニ大慈恩_ニ」と。『阿弥陀經』に西方淨土の弥陀、今現在現法すというが、此れ衆生を救うためであるが、『華嚴經』四八(大正九・七〇三)にも同様のことを説く。「善巧方便、饒_ニ益_ニ一切衆生_ニ、隨_ニ其_ニ所_ニ應_ニ、示_ニ現_ニ、於_ニ二_ニ一切時_ニ、轉_ニ正法輪_ニ、而_ニ得_ニ自_ニ在_ニ」と。

諸仏すべて、要するに利他する心あり、救済主である。これを『華嚴經』四六(大正一〇・二四三)に説く、「一切諸仏、皆悉具足利他善根、調伏衆生、無有休息」と。

此經中「名号品」は仏の身業の救いを示し、「四諦品」は口業の救い、「光明覺品」は意業の救いを示している。実に仏法は窮屈なもの退屈なものでなく、心をゆたかにさせるひろやかなものであるから、三業の救いという。そして法は耳

からだけ入るのではない。「仏不思議法品」(大正九・五九四a)には、毛孔からも入ると説く。文にいう。「一切諸仏、能以_ニ三_ニ眼入_ニ作_ニ耳入_ニ仏事_ニ、能以_ニ三_ニ舌入_ニ作_ニ身入_ニ仏事_ニ、能以_ニ三_ニ身入_ニ作_ニ意入_ニ仏事_ニ、能以_ニ三_ニ意入_ニ、於_ニ二_ニ一切世界_ニ、種種境界、世間境界、出世間境界、能_ニ作_ニ三_ニ仏事_ニ、是_ニ爲_ニ二_ニ一切諸仏自在正法_ニ。一切諸仏、於_ニ二_ニ毛孔_ニ、悉_ニ能_ニ安_ニ置_ニ一切衆生_ニ、一_ニ衆生_ニ、其身悉_ニ与_ニ三_ニ不可說不可說諸仏刹_ニ等_ニ」と。まことに仏不思議法は救済の根源に存するのである。

ところで、救済の理を知るために、生仏の關係を眺めることにしよう。まず「淨土論註」(真聖全一・二八七)に次の如く説く。「正道大慈悲出世善根生……此三界皆是有漏。邪道所生。長寢大夢莫知怖出。是故興大悲心。願我成仏、以_ニ無_ニ上_ニ正見道_ニ起_ニ清淨土_ニ出_ニ三_ニ界_ニ。性是本義、言此淨土隨順法性、不_ニ乖_ニ法本_ニ、事同華嚴經宝王如來性起義」と。この文中の性起は、如來の果上に至つては、則ち真如法性は自性に順じて淨法を起すのである。性起は其れ故に唯淨法のほかはない。縁起の方は、真妄和合して起れる諸法において染淨の差別あり、因位の如來藏と言つてよいが、性起の方は真如法性自起して諸法となるもので、唯だ淨法のみあり、果海の法身である。

この性起という面で見ると、救済者と被救済者と一如で真実であり、度无所度の理あり、救済がそういう所に当然成立

せねばならない。このことは生仏交徹の故に救済は成立する
 と言ひ換えてもよい。およそ衆生と仏とは、迷悟同じでない
 とは言え、此経一〇（大正九・四六五c）の偈文に「心仏及衆
 生、是三無差別」と説かれる如く、生仏の両者は決して二元
 的背反的対立に終るものではない。両者は固定的対立に滞る
 と考えることは誤りである。もし真に迷うて妄を起せば、仮
 りに衆生と呼ばれ、妄即真と体する故に、称して仏となすの
 み。即ち迷いなるものは、全く真に迷うから迷いと言うけれ
 ども、真を離れて迷いはなく、また悟りは妄本是れ真にほか
 ならず、決して新有ではない。相に就いて仮りに生・仏と呼
 ぶけれども、体に約するときは、それ故に、相収まることを
 得るのである。実にこのところ、生仏交徹し、二而不二であ
 り、ここに救済は成立する。

ここにおいて救済の成立根拠を深く探つてみねばならな
 い。その根拠こそは無我・無功用・無分別智と言うてもよ
 い。『探玄記』四（大正三五・一七五a）には「我是生死本」と
 も、「無我法為寂滅也」とも説き、著我の衆生の救済に
 は、無我の妙薬に依るほか無きことが説かれた。そして救済
 を成立せしめる根基として此経には回向を説く。唐の澄観著
 『華嚴経演義鈔』二三（正蔵九ノ五四二三）には、次の始く廻
 向に十種ありと説き、大要次の如く解説した。

- (1) 廻自向他、(2) 廻少向多、(3) 廻自因行向他因行、

以上の三は、衆生廻向。(4) 廻因向果、(5) 廻劣向勝、(6) 廻
 此向証、以上の三は菩提廻向。(7) 廻事向理、(8) 廻差別
 行向円融行、以上の二は實際廻向。(9) 廻世向出世、(10)
 廻順理事行向理所成事、以上の二は果及實際に通ず。

救済ということは因果の正理に背く無因有果や他因自果な
 どでは、成立不可能であるから、廻向を根底にせねばなら
 ず、自の方の何らかのものを廻して証りに向うことが必要と
 なる。この廻向は大分せば三種にすぎない。第一衆生廻向は
 自己の功德を廻して一切衆生に施すこと、第二菩提廻向は自
 己の功德を廻して菩提を趣求すること、第三實際廻向は自
 己の功德を廻して无為の涅槃を趣求することである。しかるに
 『華嚴経』は既述の如く顕と密と両面で解釈することを得る
 点に注目しなければならない。即ち顕彰の面においては、自
 力廻向であるが、しかし盧舍那仏の因果を説くということの
 他の面である弥陀浄土への証入という隠密の面においては、
 曇鸞著『浄土論註』上（真聖全一・三〇七）に説く如く、「廻
 向者廻自己功德、普施衆生共見阿弥陀如来二生二安樂国こ
 ということになる。すなわち此の廻向は顕の面における自力
 廻向ではなく、要するに他力廻向に結帰するとみることが可
 能にすると言つて良い。このことは信・念仏を重要視してい
 る『華嚴経』の趣意に立つても、言い得ることである。

『華嚴経』二五を披くに、「十地品」（大正九・五五八c）に

は「三界虚妄、但是（一）心作」と説き、同新訳の『華嚴經』三七の「十地品」（大正一〇・一九四a）には「三界所有唯是一心」と述べているが、此のことは「我の一心」即ち「はからい心」、換言すれば自力心によつて虚妄なる三界（迷界）が展開することを示す。此の迷界に反し、悟界はいかにして顯われるか。それは信によるほかなし、というのが『華嚴經』であつて、これは以下の經文によつて明了である。

「入法界品」（大正九・七八八a）にいう。「聞此法、歡喜、信心無疑者、速成無上道、与諸如来等」と。

「入法界品」（大正九・六九〇a以下）には具さに二十一種の念仏を説く。今その文は省略しておく。

「賢首菩薩品」（大正九・四三三a以下）に説く。「信為道元功德母」と。又いう。「信是宝藏第一法」と。

「明難品」（大正九・四二九b）に、まず「無有下、不具二一切仏法、而能成就、無上菩提」と説き、其の次の偈に、「一切無碍人、一道生生死」と述べる。

これは信に依る成道の理、所謂の信滿成仏思想を窺わせる文である。その信滿成仏の文は「梵行品」（大正九・四四九c）に次の如く言う。「初発心時、便成正覺」と。これは円教では初の信の位に入る時、普賢菩薩と同じく成仏し、いわゆる一位即一切位なのであり、大位を証するものである。この位には、十信・十住・十行・十廻向・十地等、一切位を

該ね収めて余す所無く、初位に成仏を説くものにほかならない。これは顯の面では、此土入聖であるが、密の面は彼の淨土に得生することを意味する。華嚴の深密の意においては、其の十信のまま、淨土門に説かれる信樂と体を同じくし、十住以下十地に至る諸位とは、この深密意からすれば信樂成就の功德にほかならない。

親鸞著『教行証文類』の「信卷」本（真聖全一・六三以下）には『華嚴經』より三文を引用した。其の第一文は旧訳「入法界品」の最後の偈（大正九・七八八b）で、「聞此法、歡喜、信心無疑者、速成無上道、与諸如来等」という。これを「信卷」に引用した理由は、信樂の義を釈するのに、必定報土、正定之因の証文とするためのものである。『華嚴經』の文に「歡喜信心無疑」とあるのは、『無量壽經』下（真聖全一・二四）の第十八願成就文の「信心歡喜」に相当し、それが能く淨土に往生して覺る因（仏因）となることを華嚴によつて証するものと言つてよい。ここに信は成仏の因であることが証明されている。救いというものは、決して无因有果や他因自果の如き外道所説のものとは異り、正しい因果の理に立つものである以上、信心成仏以外では不可能のことであり、ここに『華嚴經』の救済觀が、親鸞の慧眼を燈として窺えば、淨土の經典の救済觀と一致することを知るのである。